様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科研費
KAKENHI

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １２ 日現在

機関番号：３４４１６
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５３０２４３
研究課題名（和文）経済活動における倫理と公共性をめぐる思想系譜：２０世紀アメリカを中心に

研究課題名（英文）On the ethics and the publicness in economic activity around the 20th century America

研究代表者
佐藤　方宣（Sato, Masanobu）

関西大学・経済学部・准教授

研究者番号：９０２８６６０９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,300,000円、（間接経費）　990,000円

研究成果の概要（和文）：本研究プロジェクトを通じて、20世紀アメリカにおいて展開された経済活動における倫理と公共性をめぐる言説群を検討し，その歴史的文脈とその内実を明らかにすることを試みた．とりわけ20世紀初頭の有力な経済学者たち（ナイト，ハイエク，そしてJ.M.クラーク）らの言説を分析することを通じて，当時の経済的自由やコントロールをめぐる論議におけるそれぞれの立ち位置を明らかにできたことは，本研究プロジェクトの大きな成果と主張しうる．

研究成果の概要（英文）：In this research project, we scrutinized the discourses of the ethics and the publicness in economic activity around the 20th century America, and elucidated its contents and its historical context. Especially, it is the most important research result that we could re-mapping the positions of influential economists at that time (Knight, Hayek, and J.M.Clark) on the meaning of economic freedom and control scrutinizing their texts.

研究分野：経済思想史

科研費の分科・細目：経済学，経済学説・経済思想

キーワード：経済思想　アメリカ　経済倫理　公共性

１．研究開始当初の背景

本研究計画にとって重要な背景となったのは，(１)近年の 20 世紀アメリカ経済思想史研究における新動向と，(２)経済活動の倫理的・規範的評価をめぐる近年の一般的な問題関心の高まりであった．

近年，英語圏ではアメリカ経済思想研究への本格的な取り組みがはじまっている．とりわけ Morgan, M. S. and M. Rutherford [1998], From Inter War Pluralism to Postwar Neoclassicism , Duke University Press の収録論文に見られるように， 20 世紀初頭のアメリカ経済思想を多角的に再検討しようとする作業は活況を呈している．そのほか,Yuval Yonay, Dorothy Ross, William Barber, Malcolm Rutherford, Ross Emmett らによる研究により，これまでアメリカ経済思想をめぐる「通念」（制度派の存在の矮小化,一貫してゆるぎない新古典派像など）の問い直しが進んできた．こうした一連の動向を Ross Emmett は「近年の修正派の挑戦」と評したが，こうした一連の試みを通じて，20 世紀アメリカ経済思想をめぐるいくつかの論脈が浮かびあがってきた.

研究代表者である佐藤も，こうした動向への共感から，本研究計画開始以前からいくつかの成果を公刊してきた．ナイトやフリードマンといったシカゴ学派の市場経済理解をめぐるもの，J.M.クラークを中心とした制度派の動向をめぐるもの，そして大戦間期アメリカにおけるビジネス･エシックス論議を論じたものなどである.

そうした研究を進めていく中であらためて気づかされたのは，当時のアメリカでの論議が，現代の経済倫理やビジネス倫理をめぐって論じられる規範的問題群を先取りするようなかたちで行われていたことである．制度派の主流派経済学に対する異議申し立ては単に経済学方法論上のものではなく，「経済・ビジネス活動のコントロール」「経済活動と公共性」といった規範的な問題意識に立ったものであったし，またシカゴ学派の祖とされるナイトの中心的問題意識は「市場競争の倫理」であった．さらに 1920 年代に興隆したビジネス･エシックス論議では「ビジネスの倫理」「経営者の社会的責任」「企業の社会的責任」などが活発に論じられていた．これは 20 世紀初頭のアメリカが，組織化された産業社会の到来と共に 19 世紀的な自由主義（市場経済と政治的個人主義からなるそれ）とは異なる様相を呈したこと，それゆえに経済社会の望ましい規範的基礎をめぐる問題が問われざるを得なかったことの反映でもあるだろう.

以上のような 20 世紀初頭のアメリカ経済思想史固有の問題群への関心と，その現代的意義を視野に共に入れた作業として，2007 年 4 月に「ビジネス倫理と経済思想研究会」を立ち上げ，経済思想史・社会思想史研究者たちとともに，経済思想史的アプローチで現代のビジネス･経済倫理論議を検討する作業を進めた．2009 年に刊行した書籍『ビジネス倫理の論じ方』（ナカニシヤ出版）はその成果である．そこでは現代の「経済と倫理」をめぐる論議について思想史的知見をふまえ検討する作業を通じて，経済思想の歴史的研究を現代的な経済・ビジネス論議に資する有益な知的資産として捉える可能性が示唆された.

こうしたこれまでの研究を通じて課題として浮上したのが，今回の「経済活動における倫理と公共性をめぐる思想系譜:20 世紀アメリカを中心に」という研究課題である．従来のアメリカ経済思想研究においては，思想家個人を対象とした研究や「経済学派」の研究は行われてきたものの，「経済と倫理」といった問題史・主題先行的な観点に立った総合的な思想研究は十分行われてこなかったように思われる．なかでも「経済活動における倫理と公共性をめぐる思想系譜」という主題設定は, 20 世紀アメリカの経済思想を捉える際の固有の問題設定としてきわめて有効であるだけでなく，すぐれて現代的な意義を有する問題設定と主張しうるものであった.

２．研究の目的

本研究計画（「経済活動における倫理と公共性をめぐる思想系譜:20 世紀アメリカを中心に」）の目的は，20 世紀アメリカに見られた経済活動の倫理と公共性めぐる論議の系譜を総合的に検討し,その歴史的意義と現代的な含意を共に明らかにすることにあった．とりわけ本研究独自の特色としては，狭義の経済学内部における思想動向や論議（「シカゴ学派」や「制度派」など）だけでなく，経済学の外部で展開された「ビジネス倫理をめぐる思想系譜」とでもいうべき言説群も視野に収めるという，総合的なアプローチをとる点が挙げられる.

この研究計画の遂行を通して，（１）近年英語圏で活発化している 20 世紀アメリカ経済思想の再検討・再評価という思想史研究に対し“ 主題史 ”的なアプローチから独自の貢献を行うことと共に，（２）そこで得られた思想史的知見をベースに，近年学術的・社会的関心が大きなものとなっている現代的な経済・ビジネス倫理をめぐる論議に対し独自の貢献をすることを試みた.

より具体的には，以下の 3 つの研究の課題を挙げていた.

（１）フランク・ナイトの市場経済評価の変化を追うことを通じて，経済的自由主義に与するとされる「シカゴ学派」内部の市場経済評価の詳細と論者間での異同を明確化すること.

（２）経済活動のコントロールに与する「制度派」の代表者とされる J.M.クラークの市場経済評価と自由社会構想を明確化し，近年,

「ニューリベラリズム」の文脈での再評価が進んでいる制度派の自由主義構想の思想史的理解に貢献すること.

（3）「ビジネス・経済倫理の思想系譜」における大企業批判論の系譜を検討し，そこに見られる大企業の公共的・社会的責任をめぐる論点の明確化を図ること.

本研究プロジェクトの特色は，先述のように経済思想の歴史的知見を深める作業を,その固有の歴史的文脈に十分配慮しつつ，現代的な経済倫理の諸問題への貢献を意識しながら行うことにある.

そもそも，経済活動の「論理」と「倫理」を共に見据えて歴史的パースペクティブから論じることは，狭義の経済理論研究や実証的研究とは独立の，経済思想研究が有する固有の本来的課題といってもいいはずのものである．とりわけ競争と格差の倫理的正当化,経済活動と公共性，巨大法人企業の社会的責任論，組織のなかの個人の責任などといった現代的な課題を考えようとするとき,経済社会の組織化が進み,資本市場の整備と専門経営者の登場という「所有と経営の分離」が進行した 20 世紀アメリカの「経済活動と倫理」をめぐる論議の系譜は，まさにその固有の歴史的テーマ設定と現代的意義が特にかみ合った問題設定となる．本研究において 20 世紀アメリカに定位するかたちで経済活動と倫理をめぐる論議の系譜の詳細とその意義を明らかにすることは，経済活動の倫理の現在とその望ましい未来に関わる諸問題を考える上で，有用な活用ができるはずのものとなる.

本研究が現代的関心のもとで 20 世紀アメリカにおける経済活動における倫理と公共性めぐる思想系譜を検討しようとする理由はこの点にあり,またこの点こそが本研究が有する独創的な点といえるだろう.

３．研究の方法

本研究は 20 世紀アメリカにおける「経済活動における倫理と公共性」をめぐる論議の系譜に関心を向けるものであり，先に記したように三つの具体的な設定目標を掲げていた.（1）ナイトをはじめとする「シカゴ学派」内部の市場経済評価・自由社会構想の異同の検討,（2）J.M.クラークをはじめとする「制度派」の市場経済評価・自由社会構想の明確化,（3）「ビジネス倫理の思想系譜」における大企業の公共的・社会的責任をめぐる論議の検討，である

それぞれの主題について，基礎的文献・資料の検討と分析，国内のみならず国際学会での研究報告を通じた海外研究者との積極的議論，さらに後述の領域横断的な研究会の運営を通じた議論の深化を通じて，研究の進展が図られた.

特に本研究推進に関して独自な点として主張しうるのは，一般的な資料・文献調査だけでなく，倫理学や社会経済学といった経済思想以外のジャンルの研究者との積極的な学際的交流を行った点である．本研究計画の代表者である佐藤は, 2009 年 4 月に刊行された編著『ビジネス倫理の論じ方』（ナカニシヤ出版）の作成過程で，他の執筆者たちとともに児玉聡氏（東京大学大学院医学研究科,応用倫理学），松原隆一郎氏（東京大学大学院総合文化研究科，社会経済学），櫻井公人氏（立教大学経済学部，国際経済論）らと研究上の交流を行った（同書「あとがき」を参照).

また現在，「現代経済思想研究会 http://econthought.net/」の世話人代表（2009 年 2 月～）として，経済思想を中心とした学際的研究のためのネットワーク拠点を運営している．経済思想研究における他の専門研究者たちと学術的交流が有益であることはもちろんだが，それに加えてこうした他ジャンルの研究者たちと積極的に学際的交流を行うことで，本研究計画を推進する上での大きなアドバンテージとすることを試みた.

上記をふまえ，より具体的には以下のような方法で研究を進めた.

（1）関連

20 世紀アメリカにおける「経済活動における倫理と公共性」をめぐる代表的立場のひとつである「シカゴ学派」の市場経済評価の内実を明確化する作業として，シカゴ学派の祖とされるフランク・ナイトの経済思想の検討を行った．その際，彼の市場競争評価がどのように変化したのかを精査するため,テキストの執筆時期を「大恐慌以前」,「大恐慌期」,「第二次大戦後」と区分し，それぞれ時期における「市場」と「社会正義」をめぐる主張の変遷をテキスト分析に基づき跡付ける作業を行った．また英語論文の執筆をすすめるなかで，国際学会（アメリカの HES，ヨーロッパの ESHET などを予定）での研究報告を行い，海外の専門研究者との議論を通じた研究の深化を図った.

（2）関連

20 世紀アメリカにおける「経済活動における倫理と公共性」をめぐるもうひとつの代表的立場である「制度派」の市場経済評価を明確化する作業として,大戦間期の制度派の中心人物である J.M.クラークの思想を検討する．その際,これまで検討してきた「自由主義の変容」をめぐる初期のテキスト群だけでなく,ハイエクの『隷従への道』を批判したものとして知られる Alternative to Serfdom など第二次大戦以降のものも含めた包括的なテキストの精査を行い,その思想を分析した．また英語論文の執筆をすすめるなかで,国際学会（アメリカの HES，ヨーロッパの

ESHET などを予定）での研究報告を行い，海外の専門研究者との議論を通じた研究の深化を図った．

（３）関連
領域横断的な学術的ネットワークとして「現代経済思想研究会」を定期開催することで，現代的な経済倫理・ビジネス倫理に関わる議論の進展を図った．特に倫理学や政治哲学，さらには実業に関わる方々など，専門を異にする方々との積極的交流を進める中で，研究の深化が図られた．

４．研究成果

平成 23 年度，24 年度，25 年度，それぞれにおいて，以下のような研究成果が得られた．

<u>23 年度</u>
研究実施計画で平成 23 年度に予定していた通り，本研究計画の目的である経済社会における倫理と公共性の思想系譜の総合的検討に向けて，（１）ナイトや制度学派における「市場」と「社会正義」をめぐるテキストの思想史的検討を進めるとともに，（２）現代日本における経済と倫理をめぐる問題群について研究会を開催した．

（１）に関する具体的成果としては，まず論考「アメリカと制度経済学」（喜多見洋・水田健編『経済学史』ミネルヴァ書房，第 8 章，227-242 頁）を執筆し，2012 年 2 月に刊行された．これは 20 世紀のアメリカ経済学の展開に制度学派を位置づけたものであり，これにより本研究計画で対象とするさまざまな言説の歴史的文脈を明確化することが出来た．

また論考「市場の倫理――カーネギー，クラーク，ナイトの論じ方」（経済学史学会/井上琢智/栗田啓子/田村信一/堂目卓生/新村聡/若田部昌澄 編『古典から読み解く経済思想史』ミネルヴァ書房, 第 3 章）を執筆し，2012 年 5 月に刊行された．本稿は「市場と倫理」という今日的課題にとり，20 世紀初頭のアメリカでの経済倫理論議が持つ重要性を具体的に明らかにしたものである．本稿執筆により，20 世紀アメリカの経済思想の歴史的検討と現代的諸問題の検討とを総合的に進展させることが出来た．

（２）に関しては，現代経済思想研究会（2012 年 2 月 18 日，於：東洋大学）を開催し，「震災と教育研究機関としての大学」と題する報告を行い，また高坂勝氏（NPO 法人 SOSA PROJECT 代表）を招聘して「3・11 以降の『食』」について報告していただいた．本研究会開催により，東日本大震災と福島原発後の日本における倫理と公共性をめぐる問題について専門研究者たちと活発な議論を行うことが可能となり，次年度以降の研究推進にとって資するところが大きかった．

<u>24 年度</u>
24 年度は，23 年度の研究成果を発展させるかたちで，ナイトと同時代の思想家たち（J.M.クラークやハイエク）の思想との比較検討を深め，自由社会における市場の倫理をめぐる両者の構想の同時代的意義を明らかにすることが出来た．上記の研究の成果については，二つの論文の刊行（雑誌論文①，図書②）と，国際学会での発表（学会発表③）を行うことが出来た．

また 23 年度と同様に「現代経済思想研究会」を 3 回開催し，倫理学，社会哲学といった他領域研究者との積極的な研究交流を行うことが出来た（8 月 15 日水曜，9 月 29 日土曜，10 月 6 日土曜）．

申請時に 24 年度に予定していた通り，9 月にコルシカ大学で開催された国際学会 Eshet-Jshet（European Society for the History of Economic Thought と経済学史学会の共催大会）での研究報告を行うことが出来た．本研究の中心課題のひとつであるナイトの経済倫理観を同時代のクラークの思想と比較検討した報告を通じて，ヨーロッパ各国から集まった経済思想史研究の研究者たちと意見を交換することにより，本研究計画の今後の展開について重要な示唆を得ることが出来た．とりわけ，ナイトの市場の倫理をめぐる見解とその不確実性をめぐる見解との関連について多くの示唆を受けることが出来たのは，本研究の進捗にとって大きな成果であった．

また 24 年度の研究を通じて，ナイトと同時代のハイエクの思想との関係にまで広げることが出来たのは，「研究の目的」の達成という観点から大いにプラスに評価できる点と主張しうるだろう．このハイエク思想との比較検討については，25 年度に出版される論文集への寄稿というかたちで成果発表した．

さらに「現代経済思想研究会」では，2012 年 8 月 15 日には，功利主義思想の代表的研究者である児玉聡氏を招き，同氏の著作『功利主義入門――はじめての倫理学』（ちくま新書）の合評会を行った．コメンテーターには倫理学の江口聡氏（京都女子大学現代社会学部），奥田太郎氏（南山大学社会倫理研究所），さらに経済思想史の小沢佳史（東北大学大学院経済学研究科博士課程後期）をお招きし、功利主義についての領域横断的な議論を進めることが出来た．

2012 年 9 月 29(土曜)の研究会では，シリーズ企画「市民社会の論じ方」の一環として，植村邦彦『市民社会とは何か――基本概念の系譜』（平凡社新書，2010 年）の合評会を著者をお招きして開催した．コメンテーターには経済思想史の高橋聡氏（中央大学ほか非常勤），社会思想史の板井広明氏（東京交通短大）をお招きし，学際的な研究交流を行うこ

とが出来たことも，本研究の目的に大いに資するものであった．

10 月 6 日土曜には，橋本努『ロスト近代――資本主義の新たな駆動因』（弘文堂、2012 年）の合評会を，著者をお招きして開催した．コメンテーターには，経済哲学の玉手慎太郎氏（東北大学大学院経済学研究科博士課程），社会哲学の佐藤一進氏（京都精華大学芸術学部）をお招きし，学際的な議論を進展することが出来た．

25 年度

平成 25 年度は，20 世紀アメリカにおける「経済活動における倫理と公共性」の代表的立場のひとつである「シカゴ学派」の市場経済評価の内実を明確化する作業として，シカゴ学派の祖とされるフランク・ナイトの経済思想の検討を行った．とりわけ 25 年度は，ナイトと並んで 20 世紀の自由社会における市場の倫理をめぐる考察者として知られるハイエクの思想との比較検討を深める作業を進めた．ナイトとハイエクという，アメリカ的な「リベラル」への批判者として知られる両者が，なぜ最終的に自由社会の経済的基礎や民主主義評価について異なる見解に至ったのかを両者の自由観の根本にまでさかのぼり検討を深めることが出来た．

上記の検討作業をふまえ，本年度は，論文の刊行（図書①）と，国内・国際学会での研究報告（学会発表①，②）を行うことが出来た．

また 25 年度も「現代思想研究会」を 2 回開催し，倫理学，社会哲学といった関連領域の研究者との学際的な交流の中で，近代思想における経済倫理の問題や経済思想の方法論的問題の検討などを行うことが出来た（2013 年 6 月 1 日土曜，2014 年 1 月 11 日土曜）．

2013 年 6 月 1 日土曜の研究会では，野原慎司『アダム・スミスの近代性の根源――市場はなぜ見出されたのか』（京都大学学術出版会、2013 年）の合評会を著者をお招きして開催した．コメンテーターには政治思想の安藤裕介氏（立教大学法学部）をお招きし，領域横断的な議論を進展することが出来た．

また 2014 年 1 月 11 日土曜には，2 つの研究報告からなる研究会を開催した．

「経済思想研究についての方法論的覚え書き」（報告者：玉手慎太郎，東北大学大学院経済学研究科博士課程）のコメンテーターは，経済思想史の野原慎司氏（京都大学・経済資料センター），社会思想史の松本哲人（関西大学ほか非常勤），社会思想史の板井広明（青山学院大学ほか非常勤）に依頼した．

「社会思想史研究についての方法論的覚え書き」（報告者：林直樹，尾道市立大学・経済情報学部）のコメンテーターは，経済荘子氏の生垣琴絵氏（小樽商科大学・教育開発センター），経済思想史の西本和見氏（中部大学・全学共通教育部），経済思想史の高橋聡氏（中央大学ほか非常勤），さらに全体の統括コメントを経済学方法論の原谷直樹氏（群馬県立女子大学・国際コミュニケーション学部）に依頼した．思想史的アプローチをとる本研究プロジェクトの方法論的基礎に関わる議論の進展を図ることが出来た．

５．主な発表論文等

（研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　１件）

①佐藤方宣『市場の倫理と討議の倫理――自由主義の変容とナイト』『関西大学経済学会 Working Paper Series』Ｊ-33，2012 年[査読なし]

〔学会発表〕（計　４件）

①SATO, Masanobu “Hayek and Knight on the Economic Conditions of Liberal Society : Why two critics of ‘Liberals’ had come to different conclusions? , The 2013 History of Economics Society's Annual Conference, 22, June, 2013, the University of British Columbia, Vancouver, Canada.

②佐藤方宣「ハイエクとナイト――「リベラル」批判と実質的自由」経済学史学会東北部会，2013 年 4 月 20 日，山形大学・大学コンソーシアムやまがた．

③SATO, Masanobu “J.M. Clark and F.H. Knight on the Conditions of Liberal Society: What's the Crisis of Liberalism?”, 3rd ESHET-JSHET Meeting "Crises and Space in the History of Economic Thought" - Japanese and European Societies for the History of Economic Thought, 14, September, 2012, the University of Corsica, Corte, France.

④佐藤方宣「震災と研究教育機関としての大学」現代経済思想研究会，東洋大学・白山キャンパス，2012 年 2 月 12 日．

〔図書〕（計　３件）

①桂木隆夫編『ハイエクを読む』ナカニシヤ出版，2014(佐藤方宣「第 8 章　ハイエクとナイト II――「リベラル」批判の二つの帰趨」)，196 - 222 頁．

②経済学史学会編『古典から読み解く経済思想史』ミネルヴァ書房, 2012 (佐藤方宣　「第 3 章　市場の倫理――カーネギー, クラーク, ナイトの論じ方」)，　63-80 頁．

③喜多見洋・水田健編『経済学史』ミネルヴァ書房，2012（佐藤方宣「第８章　アメリカと制度経済学」），227-242 頁.

〔産業財産権〕
○出願状況（計　０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
佐藤方宣（SATO，Masanobu）
関西大学・経済学部・准教授
研究者番号：90286609

(2)研究分担者
(　　　)

研究者番号：

(3)連携研究者
(　　　)

研究者番号：